

すが、昭和二十年八月にかけては随分激しい戦闘があったと聞きました。従って、我々船舶部隊、碇泊場も、米中空軍の重爆撃により大きな被害を毎日受けていたのです。

資料によりますと、

船舶兵団司令部 一、船舶輸送司令部 五、  
船舶輸送司令部 二六、野戦輸送隊司令部 一、  
船舶輸送地区隊司令部 二、船舶団司令部 七、  
東京船舶隊 一、碇泊場司令部 二六、  
船舶砲兵団司令部 一、  
と多くの司令部が各地に位置しておったのです。我々も、その一つの司令部に勤務しておった訳であります。

その隷下、指揮下に、

各種連隊 四六、大隊 六〇、隊 一八一、  
廠 四八、班 三五、その他を含め 四六八、  
で陸軍船舶部隊が編成されていきました。

## 初年兵の初陣

### ―矢部伍長の戦死を悼む―

神奈川県 森 道 一

仕事に情熱を傾けている若者、学業半ばの青年、恋をささやき二人の将来を語りあっていた人たち。これらの人たちを戦争という黒い影はその絆を断ち切っていた。そして、暗い影を残して若者は戦地に征き、大陸の広野に、南海の孤島に、あるいは海の藻屑と消えた。最後に「お母さん」と叫びつつ。しかし誰もそれを語ろうとしない。

昭和十六（一九四一）年七月、私は東部第六十三部隊に召集された。今日も、甲府盆地に真夏の太陽が、ギラギラと照り付け、その下を重い重機関銃を肩に食い込ませ、額の汗を拭うこともせず、重い足取りで行進する兵の一団を指揮する長谷川少尉、ムチを片手にしている班長。軍歌は歩兵の本領『満朶の桜』、大声

をあげようとすると、咽がひりひり乾き「声が小さい！」と、助手の罵声がとぶ。衛門が見える「步調とれ！」の号令に、立哨中の歩哨はキョロ、キョロ見回している。

長谷川少尉の軍刀がキラキラと光る。衛兵司令は慌てふためいて、衛兵を整理させ「捧げ銃！」と、部隊に対する礼をする。と、少尉に目礼を送る。カツカツと軍靴の響きを残して宮庭に、我々初年兵は体の汗を拭う暇なく、週番上等兵の甲高い「飯上げ、集合！」。銃の当番は機関銃の手入れ、その他の者は「休憩、解散！」の声と共に、要領のよい奴は班長の足にとびつき、巻脚絆を取る、助手の足もとにも。この情景を、うつろな眼で見つめる兵の顔。こうした日課を、三ヵ月過ぎ、一期の検閲、二期、三期と過ぎるのと共に同年兵の姿は、だんだんと少なくなっていく。

私は、このような初年兵時代を経て、南中国へと勤務の場が変わった。珠江の流れ、広東の街、フランス、イギリス租界、中国人や在留邦人の行き交う中を、只々黙々と勤務に就く兵隊。

私達は、珠江に架る「海珠橋」分哨の歩哨に立った。早朝から、野菜や果実を街に運ぶ農夫、これらを検問し、便衣隊員や、武器・弾薬・アヘン等の流入を防ぐのが、主な任務で、その中でよいことばかりでなく、嫌な事も度々ある。軍直轄の巡察官は真夜中にもやって来る。下手をすると、さんざん油を絞られ、軍会報に載り、あげくの果てに、中隊長からお目玉を頂戴し、外出止めを食うこともある。職権を肩にして、良民を苦しめれば、当然罰が待っている。不心得な兵隊は、隊の中でも評判となる。五十何年経った現在でも、その悪名は戦友会で語られることもある。

こうした生活は長く続かない。作戦に、討伐に出動すれば、昨日まで一緒に飲んだ戦友は無言で帰って来る。当時の若者の命はこうして消えていったのです。

初年兵 威張る奴には 舌を出し  
敵襲に もたつく兵の 銃を奪り  
弾の下 クリークの深さ 計りけり  
初年兵 敬礼するにも 肩をあげ

浦賀の沖に帰りしに 故郷の便に父は亡く  
浦賀沖に 着きたれど 帰れる家今はなく

昭和二十年五月 空襲で家は消失

亡き戦友に 会いに来たよと ひざまづき

靖国の 見上げる空に 大鳥居

靖国神社 慰霊祭にて

当時の青春は、作戦に討伐に、分哨勤務に故郷の山河を思い浮かべ、遠く異国の空の下で、母を思い浮かべる青春であった。

中山県石岐討伐戦 矢部伍長戦死す

昭和十七年八月十五日払暁、携帯食料三食分を携帯して、我が第一中隊は、指揮班・第一小隊・第三小隊・機関銃一個分隊の編成で、石岐馬頭棧橋から、ヤンマー船（小型発動機船）に便乗し、一路東方に向かって出発した。

中隊の編成は、

中隊長西田中尉、指揮班長椎名伍長、

第一小隊長は中隊長指揮下、第三小隊長戸山准尉、機関銃小隊長北浦少尉、分隊長中村伍長、

一番森上等兵、二番田村上等兵、三番浅田上等兵、四番射手小和田兵長、五番以下清水上等兵、石井一等兵、伝令神田一等兵の編成。

この討伐戦は、初年兵にとっては初陣で、細かいことは判明しないが、歩兵砲隊が参加していたので、部隊（大隊）討伐戦であった。途中、小覧小哨に立ち寄り、小覧小哨には柴田昌之少尉以下がその任に就いていた。

小覧小哨は、クリークの正面に衛兵所があり、裏山に岩山分哨、右側は部落となり、同年兵の古屋・越智上等兵・菱山・田中・金子一等兵も、小覧小哨勤務をしていた。小哨で兵員の補充をし、再度東方に向かって出発したのは十一時頃であった。

真夏の太陽が頭上を照り付け暑い日であった。幅広いクリークから細いクリークに入り、両岸には荔枝（ライチー）や、龍眼の木が覆いかぶさり、涼しい風

が吹き抜け、やれやれと思いながら、ヤンマーの展望台に重機関銃を据え、田村上等兵と共に警戒の任に就いていた。

その頃、先頭を行く第一小隊の兵が、クリークに掛けてある板橋に鉄帽を引掛け、クリークの中に落ちて探している間に、指揮班のヤンマーが先行する隊形になり、そのまま進んで行った。

何分か過ぎた時に、突然チェッコ式軽機関銃のけたましい射撃音、タタ、タタ。分隊長が「それ始まった、ヤンマーを左岸に着けろ」と叫ぶ。我々初年兵は、何が何だか分からず、ただ武者振いするばかりであった。

左岸に上陸し、機関銃を据えてみると、一方はクリーク、反対側は田圃の一本道で遮蔽物はなく、どうすることもできない。分隊長が叫ぶ「ここは駄目だ、右側に着ける、早く機関銃が前に出ないと中サン（中隊長）に叱られますよ」「分かっている」と、小隊長の返事が返ってきた。

ようやく右岸に着け、分解搬送で乗烟の中をクリー

クに添って走ったが、弾が頭上をビーン、ビーンとかすめる。古参兵が「こんなに弾丸が来るのは初めてだ」とぼやく。神田一等兵は転がるようにして小隊長の後に続く。分隊長は、一字鍬と収納箱を持って先頭に立って走り続ける。距離にして二百メートルか、三百メートル走った。前方は目に入るが、後方に対しては、どうだったのか記憶にない。皆、懸命に走って追いついて来たと思う。

しかし、前方にクリークが横たわり、前進することは不可能となり、土手に伏せ、銃身を右大腿に乗せ一息入れる。敵弾は間断なく土手に突きささる。分隊長の「銃据え！」の声に、やっとの思いで銃を据え、田村上等兵が装填し、大和田兵長が射ち始めた。

前方のクリークの中を兵が銃を背負って、アップ、アップしながら「機関銃前へ！」「機関銃前へ！」と泳いで来る。同年兵の山本上等兵だ。弾の中を伝令に來たのだ。大丈夫かなと思いつながら見守った。

敵は、前方五十メートルの地点の望楼から射ち続けている。分隊長が小隊長に「向こう岸に渡らなければ

駄目です。誰かクリークの深さを計れ」と言う。私はとっさに、帯剣、帯革、雑のう、水筒を外し、身支度した。浅田上等兵が「森行くとやられるから止める！」と怒鳴る。分隊長が「大丈夫だ行け！」と怒鳴り返す。私は、土手を滑るように手早く、クリークの中に飛び込んだ。深さを計るが足が届かない。

分隊長は、小隊長に「どうしますか」、小隊長は判断に困った顔をした。ちょうど潮の流れの關係で指揮班のヤンマーが横に流され、ちょうど、橋のようになった。分隊長は舳先の所まで泳ぎ、計ってみると、胸の所までの深さとなり、分隊長は「ヤンマーを利用して銃を渡せ」と叫ぶ。大和田兵長、田村上等兵も、クリークの中に飛び込む。銃身を大和田兵長に渡し、弾薬箱を田村上等兵の肩に乗せてやると、田村上等兵はよろけて、クリークの中にドンブリと落す。

次の弾薬箱を渡してやる。敵はヤンマーを目標に射ってくる。ようやく向こう岸に辿り着き、銃を据え、大和田兵長が射ち始める。後方の歩兵砲が準備できたか砲撃を開始する。その一発が望楼の右端に命中

する。すると、敵は潮の引く如く敗走し始めた。

一方、先頭にたった指揮班のヤンマーが、その地点に差し掛かった時に、急にエンジンが止まったので、プロペラに網が引掛かっただと思ひ、裸になって荒川軍曹がクリークの中に飛び込むと、同時に敵の一斉射撃が始まった。

ヤンマーの中では、矢部上等兵は、右往左往する初年兵から銃を奪い取り、勇敢にも敵前三〇メートルの洲の所まで泳ぎ着き、前進して軽機関銃を据え、連続射ちを始めた。敵もさる者、戦闘の常套手段である「長い槍を撲滅することを第一条件」と知っていた。

その地点での最大の火器、軽機関銃を狙い始め、狙撃兵の射った弾は、矢部上等兵の右横腹から、左横腹にかけて盲管銃創、「やられた！」と一言を残して名譽の戦死をとげられた。

矢部上等兵殿は、普段、班内において非常にやさしい古参兵で、初年兵の面倒見もよい人だった。既に満期（召集解除、除隊）の内示もあり、班内には満期用

の国民服・短靴等も揃え、いつ満期になってもよい準備をされており、今度の討伐戦には自ら進んで参加されたのに、中隊ただ一人の戦死者が、不幸にも今まで充分御奉公されて来られた矢部上等兵殿であったとは……。人の命のはかなさは、運命の悪戯と言いつれぬものだ、つくづく感じたのであります。

戦い済んで、矢部上等兵殿の御遺体を清め、祭壇を設け、屍衛兵に立ちました。

また、ヤンマーの艇長の荒川軍曹が行方不明になったので、川下百メートルの地点に、川幅いっぱい竹のすのこを張り、警備要員を除き、全員裸で禪一本となってクリークの中に入り捜索を行ったが、その時は遺体は発見できなかった。

その日の捜査は打切り、野営することとなり、食事後、矢部上等兵殿の屍衛兵に交替で立った。夜は更け、遠く聞こえる犬の遠吠えに何か悲しい思い出の一夜は明けた。

朝食もそこそこに、遺体の捜査は続行された。空し

く時は過ぎ、昼食のため一旦休憩し、再度捜査を始めた。真夏の太陽は照り付け、背中はビリビリする。裸は真っ赤に染まり、五、六人一列になって河下に行ったり、川上に戻ったり、捜査は続ける。クリークの中に入るのは初年兵の役目で、古参兵は岸で「あっちでもない」「こっちでもない」と言うだけ、クリークの中の初年兵の皮膚はふやけ、ほんとうに嫌になった。そのうち、川下で「あつたぞう」と呼ぶ声、一斉にその方向に走り出す。遺体の状況から判断すると、初弾で倒れ、水を大分飲んだようにみえた。久保田衛生兵が遺体を清め、毛利軍医の立会いでヤンマーに安置し、矢部上等兵の遺体を指揮班のヤンマーに安置し、帰隊準備にかかった。

帰路につく頃より小雨が降り出し、日はとっぷり暮れ、その中で乾パンをかじる。味けなさ。

思えばこの大戦で、幾多の将兵が大陸の広野に、南海の孤島に、祖国を思い、故郷の山河を思い浮かべ、最期は肉親を思いながら散っていったのです。